



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	小泉, 格
Citation	
Issue Date	2000-04-10
DOI	
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59441
Right	
Type	book
Additional Information	
File Information	hakubutukan2.pdf



[Instructions for use](#)

ISSN 1345-059X

北海道大学総合博物館ニュース
The Hokkaido University Museum

News

第2号

Number 2



北海道大学総合博物館

特別寄稿

重要文化財「第2農場」の歴史

北海道大学評議会は、中央道路北端にある国指定の重要文化財「第2農場」を総合博物館が主体となって一般公開する方針を決定した。同農場は、1876年8月14日の「札幌農学校」開校式から遅れること29日目に誕生した「日本畜産発祥の地」であるばかりか、北大の発展を下支えして来た生き証人でもあるため、ここの公開は、創基125周年事業で計画される「遠友学舎」と「遺跡公園」を環状線エルムトンネル上の遊歩道で結んで、北大の新しい文化発信地になると期待される。特に同所の「産室追込所及耕馬舎（別称：模範家畜房，Model Barn）」と「穀物庫（Corn Barn）」は、1877年初秋に建築された本邦最古の洋風農業建築物であるが、本学ゆかりの「演武場（札幌時計台）」より1年古くて北大最古の記念建造物である。加えて同建築物は、昨今の建築業界で言われるツーバイフォー様式とバルーンフレーム様式を採用しており、これが理由になって重要文化財に指定された経過があるほど価値が高い。ここでは、第2農場の歴史について概説する。

原始の森に覆われた未開地「北海道」は、明治維新を迎え、ロシアの南下策に対する北辺鎖鑰（さやく）、士族への殖産などのために緊急開拓が求められた。北海道開拓使の黒田清隆らは、1871年にアメリカ農務局長Horace Capronらを招請して開拓手法を探らせ、米国式の畜力機械化畑作・畜産をもって開発を進めることにした。しかし、この農法は、諸国大名の禄高が米の石数で決まっていたように、人力稲作中心の日本人には初めてであり、畜力の利用と大規模畑作・畜産経営ばかりか、畑作物による洋食風の食事習慣や牛乳を飲む習慣すらなくて混乱した。しかし、年以内に開拓すれば5haの土地が貰えると移住者も多く、幾多の困難にうち勝って今日の食糧基地北海道が生まれている。札幌農学校は、北海道開拓の高等技術者を養成するために設けられたが、教頭に着任したWilliam S. Clark先生は、未知の農業を教えるには実践が不可欠として農学校付属の農園（College Farmの訳）を開いた。ここでは教育研究のための第1農場と一軒の酪農家を模した第2農場を設けて、畜産経営のあるべき姿を実践・展示した。これを後継した農学担当のWilliam P. Brooks先生は2年で見事な農場に仕上げ、この実績を通して全北海道に酪農・農業技術が広められた。府県への畜産普及には千葉県「御料牧場」が大きく貢献して畜産発祥の地と言われるが、成田空港開設のため当時の資産は皆無になったため、北海道農業を広めた第2農場のみが本邦唯一の米欧畑作・畜産導入に関わる遺構となった。

北2条の時計台一帯にあった札幌農学校校舎は、帝国大学昇格のために現在の農学部地域に移転して第1農場の農地を使った。これに現在の大学院地球環境科学研究科の



自然と調和した重文第2農場（左から模範家畜房、牝牛舎、種牛舎）

地域に予修科（後の予科）の新設、実現は関東大震災などで遅れるが、現在の大学センター地域に医学部の新設などを見込んで、第2農場の施設も現在の北18条地域に移転させられた。この際、経費節減のためか、由緒ある模範家畜房や穀物庫などは移設され、その他の施設建物も解体古材を使ったが、サイロなど当時の最新技術を注ぎ込んだ牧牛舎のみは新建材で作られている。その後の第2農場は、東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学、新制の北海道大学へと組織こそ変わりながら、1969年まで農場第2畜産部として活躍を続ける。特に明治22年に新しい乳牛としてホルスタイン種を導入してからは、優良基礎牛を出荷し続けて北海道酪農の基盤形成に大きく貢献するばかりか、今日も血統を維持して生産する雄牝別に1100産を数えることも特筆すべきことである。また、同施設内には、創立以来利用した農機具をすべて収蔵し、建物と一体になって存在価値を高めている。特に1871年にCapronが持ち込んだ数十点、農学校開校と共に購入した数十点、北海道開拓に合わせて1900年までに米欧から輸入した百数十点などは、北海道開拓の推移を示して貴重な資料であるが、米欧の博物館でも珍しいリーパー（麦刈機、Reaper）、全国何処にもない百点以上の鋤の収藏品などは世界に誇る標本である。

1969年には、低温研と獣医学部の移転用地を提供するため、牛舎施設を現在地に移転して93年にわたる第2農場の使命は完了した。しかし、用途廃止が届けられると同時に文化庁から重要文化財に指定され、約7年を費やして全面解体復元工事を行って永久保存を図った。その間、1976年の創基百周年で前述の農機具を中心に施設を一般公開した経過はあるものの、その他はガードマンによって24時間管理され、前庭を除いて施設内は公開していない。

高井宗宏（前大学院農学研究科・教授）

モデルバーン等の一般公開について

「モデルバーン等の一般公開に関するワーキンググループ」（委員長 大田原高昭教授）は、以下のような答申を丹保総長あて平成11年12月24日に行いました。

・モデルバーン等の一般公開は、平成9年11月26日評議会了承「博物館事業の展開について」（1）整理済のコレクションの展示公開（例示：モデルバーンの公開）に該当すること。

・モデルバーン等の一般公開は、展示物（主に解説文）の追加と環境整備を行えば直ちに部分的に可能であるし、更に年次計画によって充実を図れば極めて特色のある文化発進地となり得ること。

・モデルバーン等の一般公開は、総合博物館の展示機能と調和を図る必要があることから、総合博物館が主体となって実施すること。

ただし、現在の総合博物館の組織・人員・予算等からみて、重要文化財に指定されている建物・敷地等ハード部分の保守・管理を担当するのは困難なので、従来から建物・敷地等の保守・管理を担当している経理部経理課が引き続きその任に当たること。

総合博物館は、収蔵物・展示物の管理、公開内容の決定、公開に必要な説明用看板・テープ・パンフレット等の作成・管理、実際の一般公開時の案内・説明、そのための要員（非常勤職員・ボランティア等を含む）の管理・養成等、一般公開に関するソフト部分を担当すること。

要員の確保等に必要な経費は全学的に措置すること。

総合博物館は、運営委員会のもとに、例えば、「モデルバーン等の一般公開に関する委員会（仮称）」を置き、上記の業務に当たること。この委員会には、建物・敷地等ハード部分の保守・管理を担当する経理部経理課にも参加してもらい、密接な連携のうえで重要文化財の的確な保守・管理と一般公開の円滑な実施ができるよう努めること。

この答申を受けて、総合博物館では運営委員会のもとに「モデルバーン等の一般公開に関する専門委員会」を設置しました。

小泉 格（館長）

創基125周年記念事業 「学内の歴史的資料の整理」

125周年記念事業「学内の歴史的資料の整理・展示」は、本学の博物館と図書館とにおいてそれぞれ企画されておりますが、ここでは博物館（企画展示専門委員会）で検討が進んでいる企画展示内容の概要をご紹介します。

『本学のユニバーシティミュージアムでは、「文明支援型大学」から「文化創出型大学」への大学意志を表出することを強く意識しながら、①創立以来120余年以上にわたり蓄積された、多様かつ大量な学術的な資料と標本の保存・管理と展示公開をとおして、②自然史、文化史、文明史、思潮史、技術史などの総合的な観点から、③北海道大学の教育・研究の支援ならびに先端的な研究の過去・現在・未来を統合的に表現・伝達し、④地域社会への学術情報の還元や交流のみならず、⑤知の総体としての20世紀の北海道大学における精神と学問の歴史の継承と展開を目的として、⑥21世紀の新たな大学像を展望すること、が根幹の理念である』と企画展示専門委員会はミュージアム計画を理解しつつ125周年の企画展示を構想しております。

理学部建物の一部（南側1・2階）が改修され、博物館の一部として再利用され始めました。125周年記念展示は改修部を利用して、「拓く・究める、そして未来」をメインテーマとして、北大へ入学したフレッシュヤーズや来学者に加え、地域の人々や学究の緒についての方などを対象にして、次のような内容で企画が組み立てられつつあります。

I) 「記念ホールゾーン」：

- ①「北海道大学との対話」；来館者へのメッセージや北大総体とキャンパスの紹介、
- ②「通底する精神」－札幌農学校－；北海道大学の創設と世界の時代背景、西洋文化とキリスト教精神、リベラリズムを支えた人々と風景、フロンティア精神と国際性、プラグマティズムを育んだ風土、全人教育など
- ③「知との対話」－サロン－；知の蓄積に学ぶ、知の創造へのヒント、北方への視点、社会へのまなざし、新しい北海道大学の像などを主題として、ミニ・シンポジウムやサロントークで定期的な情報発信、

II) 「展示ゾーン」；ガイダンス展示とテーマ展示

- ①北海道大学における125年の研究業績と成果の歩みを紹介・解説
- ②北海道大学の社会貢献の歴史と系譜
- ③過去の業績を未来へつなぐ
- ④未来を予兆する現在のテーマ
- ⑤21世紀の予測

「全学を有機的に結びつけた総合的な企画展示であることが大切である」と考えておりますので、12年度では企画の具体化にあたって、多くの皆様のご協力をお願いすることになると思います。どうぞよろしく願いいたします。

企画展示専門委員会（委員長 小林英嗣）

北海道大学総合博物館の入館者10,000人を達成

モデル展示－地球惑星科学分野－「北の大地が大洋と出会うところ－アイランド・アーク」－岩石・鉱物・鉱床・化石・地層とそれらの歴史－が、先行企画として平成10年11月24日に一般公開されてから1年経たない平成11年10月6日入館者が10,000人に達した。これを記念して10,000人目の入館者となった道内を旅行中の新潟大学工学部学生の遠藤 豪さんに、本館研究部長の松枝大治教授から「記念の証」と記念品が手渡され、記念撮影が行われました。



松枝研究部長から「記念証」と記念品を受け取る遠藤さん

平成12年3月31日までの入館者は、12,779名となりました。

総長裁量経費による「札幌キャンパスの自然と文化史」

「博物館事業の展開について」の一環として、上記の活動を実施している。大学院地球環境科学研究科平川教授のグループは、1949年（昭和24年）と1998年の航空写真から地形と建物配置の50年間の移り変わりを復元し、キャンパスジオラマを作成中です。この基本図の中に埋蔵文化財や樹木類などを記入していく予定です。また、工学研究科越野教授のグループは、農学部旧本館の40分の1木製模型を復元を制作しました。

小泉 格（館長）

外国人研究員

(客員教授デイヴィッド ワイシャンペル)

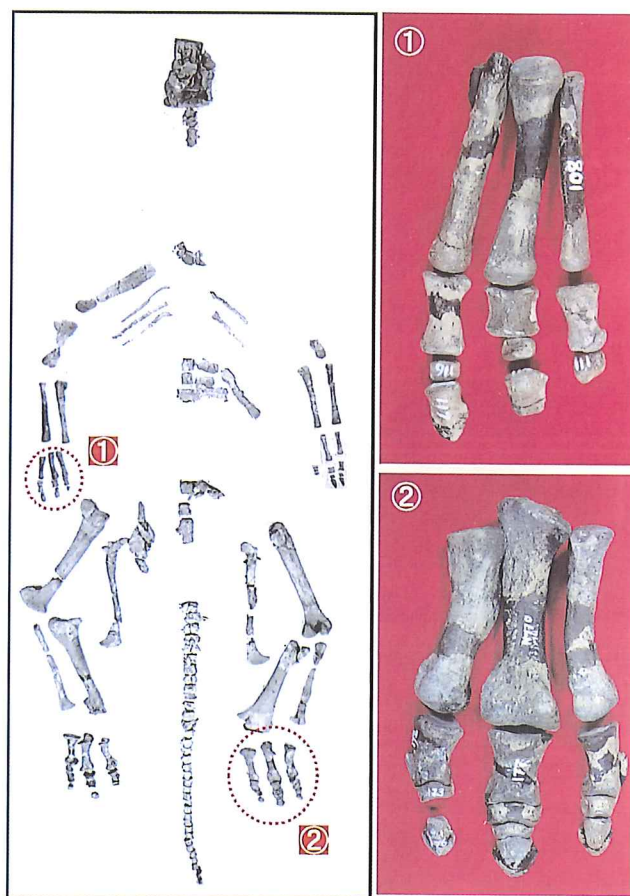
平成11年度外国人研究員(客員)として、ジョンズホプキンス大学医学部のDavid B. Weishampel 教授をニッポノサウルス(日本竜)の断片骨標本の種の同定及びそれに伴う同竜化石を再検討するために招へいしました。

ニッポノサウルス骨格の形態について共同研究した結果、(1) 歯に見られる左右の小リッジが非対称であり、従来のハドロサウルス類には認められていないことからニッポノサウルスは原始的な恐竜である可能性が高いこと、(2) 頬骨下端部のとがり方が強いことから幼体または原始的な種類を示唆していること、(3) 坐骨先端部のブーツ状ふくらみが極めて強いことから、もし幼体でこのように強いふくらみを持つとすれば極めて原始的な形質であること、(4) 中手骨の近位骨端部に外方に張り出した強いふくらみは従来のハドロサウルス類にも見られない形質であること、(5) 3つの脊椎骨が癒合した仙椎の化骨と癒合の状況は従来知られているハドロサウルス類の幼体に認められるものと同程度であること、

(6) 詳細な系統解析によってニッポノサウルスは北米産のヒパクロサウルスに極めて近縁であること、(7) 北米起源の草食鳥脚類類恐竜がベーリング陸橋(ベーリングア)を渡ってアジアに移住し、独自に進化したことなどが判明しました。

また、ハドロサウルス類を主とした鳥脚類恐竜についての15回30時間の講義を行いました。特に、中部ヨーロッパアルバニア産の白亜紀前期の恐竜が孤立した島弧状の環境のもとで独特の進化を遂げたことを知ることができました。

箕浦名知男(研究部助教授)



岩石鉱物特別展示「シリカ鉱物」 —非晶質シリカを含む地質物質—

水晶は知らない人がいないというほどよく知られている鉱物です。鉱物名は石英。ケイ素と酸素の（二酸化ケイ素）化合物、化学式は SiO_2 です。

色の違いだけでも、紫色の紫水晶（アメシスト）、ピンク色の紅水晶（ローズクォーツ）、黄色の黄水晶（シトリン）、黒色の煙水晶（黒水晶）、乳白色の乳水晶など、さまざまな水晶が知られています。一般的には、無色透明で、結晶面のみごとな六角柱の外形をしています。水晶の両端に錐面をもつ両頭水晶や片側に大きな錐面ができた松茸水晶もあります。まれに、流体包有物を含む水入り水晶や細毛状のルチル（金紅石）を多数含む金線入り水晶、銀線入り水晶などもあります。特定の結晶面が接合した双子の結晶（双晶）もしばしば産出し、ドフィネ双晶やブラジル双晶、日本式双晶などが有名です。



特別展示標本 ブラジル産の紫水晶（アメシスト）

SiO_2 という同じ化学組成をもっている、結晶構造が異なる多形のシリカ鉱物が知られています。水晶と呼ばれる石英をはじめ、トリディマイト（燐けい石）、クリストバライト（クリストバル石）、オパール、ルシャトリエライト、コーサイト、スティショバイトなどです。これらのうち、石英がもっとも普通に多産するシリカ鉱物です。どこで、どのようなシリカ鉱物ができるかについては、温度や圧力など、生成条件の違いによっています。高温型石英や、トリディマイト、クリストバライトなどは、火山岩の中に含まれており、高温マグマの結晶作用でできたシリカ鉱物です。また、コーサイトやスティショバイトは高圧タイプのシリカ鉱物で、最初は実験室でつくられ、その後米国アリゾナ州のいん石クレーターの砂岩から発見されました。いん石が地表に衝突したときの衝撃圧で生じた鉱物です。



岩石鉱物特別展示 「シリカ鉱物」 -非晶質シリカを含む地質物質-

さて、「地球はいん石が濃集してできた」と多くの人が信じています。地球は、中心から地表にむかってコア・マントル・地殻という成層構造になっていますが、地球の「いん石」起源説にたてば、地球全体の平均的な化学組成はいん石質であると予想されます。また、地球表層の地殻の総化学組成は、人間の住む地表に露出する岩石の化学組成から見積もられており、その約60%が SiO_2 （シリカ）なのです。地表にはシリカ鉱物やシリカ成分に富む物質が多量に含まれていますので、私たち人間は「シリカ鉱物やシリカ成分に富む物質とともに生きている」といえます。北海道大学総合博物館の岩石鉱物の特別展示として、まず最初に「シリカ鉱物」をとりあげた動機がここにあります。

深海底では、過去でも現在でも、 SiO_2 （シリカ）に富むチャートなどの珪質堆積岩がつくられていますし、珪藻化石が堆積して珪藻土になっています。また、これらが地中に持ち込まれて石英片岩などの変成岩がつけられます。日本列島のように火山活動の活発な地熱地帯では熱水活動によって地下で SiO_2 （シリカ）成分が移動・循環するので、多量の低温型石英が晶出したり、オパールや珪化木などシリカに富む物質がつけられています。

特別展では、このようなシリカ鉱物やシリカに富む地質物質の代表的な標本36点が展示されています。ぜひ一度、ご覧いただければ幸いです。この特別展に展示中の標本は、以下の6名からお借りしたものです。鈴木徳行・渡辺暉夫・桑島俊昭・箕浦名知男・松枝大治・小泉 格（敬称略）。文末になりましたが、記してお礼申し上げます。

ご意見・ご質問などは、kiyo@ep.sci.hokudai.ac.jp まで下さい。

新井田清信（資料部研究員、理学研究科・助教授）

「黒鉱シンポジウム」開催される

含金銀黒鉱型鉱化作用の特性と成因
—特に秋田と北海道における黒鉱型鉱化作用の比較検討—

日時：平成12年1月21日（金）

場所：合同庁舎（地質調査所北海道支所）6F第1会議室

主催：北海道資源地質研究会

共催：北海道大学総合博物館・地質調査所北海道支所

松枝大治（北大総合博物館）：開会の挨拶

石川洋平（秋田大）：秋田県花岡黒鉱鉱床地域～秋田市北方馬場目黒鉱鉱床地域の下部グリーンタフ火山層序と黒鉱鉱化作用

八幡正弘・黒沢邦彦（道地質研）：北海道における黒鉱層準

松枝大治（北大総合博物館）：釈迦内鉱山のAu-Ag-Bi-Teに富む斑銅鉱鉱石の鉱物共生と化学組成

今井 亮（東大）：褐色黒鉱の特性と成因

石山大三（秋田大）・広瀬和世（資源・環境観測解析センター）・水田敏夫・松葉谷 治（秋田大）：温川鉱床の金鉱化作用

矢島太郎（金属鉱業事業団）：黒鉱鉱床における鉱石組織及び黄銅鉱病変組織の分布

太田英順（地調北海道支所）：北海道の黒鉱鉱床—その概観と統計—

前田寛之（北見工大）：北海道余市元山黒鉱型鉱床付近の熱水変質作用

黒沢邦彦・八幡正弘（道地質研）：国富鉱山の黒鉱鉱床について

小野修司（北大）：洞爺財田鉱床の含金銀鉱石と鉱石鉱物

半田哲朗（北大）：南白老鉱床の鉱物学的・地球化学的特徴と生成環境

総合討論

世界的に著名なわが国の黒鉱鉱床の地質・層序、年代論、鉱化作用（特に金銀鉱化作用）、変質作用、生成環境、鉱物学・鉱石組織学、成因、起源など種々のテーマで話題提供がなされた。シンポジウムでは、約50名余の産・官・学各分野からの参加者のもとで、特に北海道における“黒鉱型”鉱化作用及びそれと密接な関係を有する鉱化作用における種々の問題点の掘り起こしと、新たな今後の研究の展開、鉱床探査に資する活発かつ有益な議論が展開された。

松枝大治（研究部長）

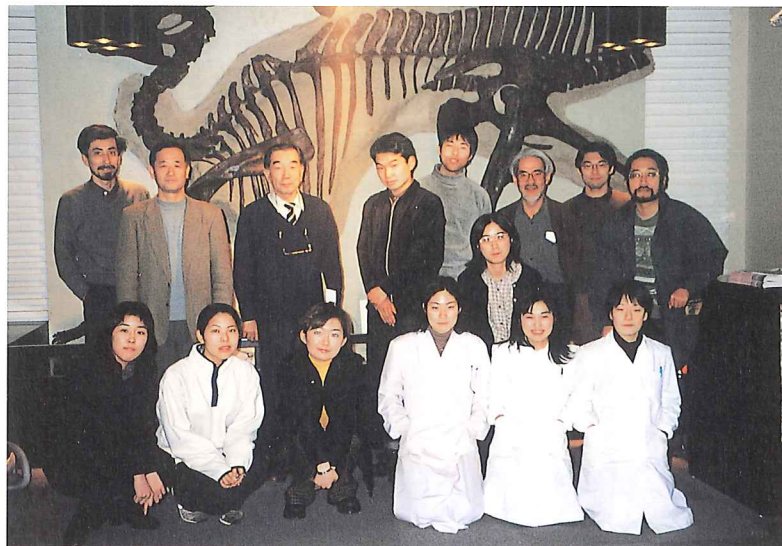
博物館実習の受け入れ

本学文学部の履修科目である博物館実習が平成12年1月11日（火）から20日（木）まで実施されました。受講者9名は本館所属の指導教官のもとで、学術標本に触れ、その整理及び修復などを実際に行うと共に、データベースへの登録方法を目で見学し、また、講義においても電子顕微鏡などにより実際の学術標本類を観察し、その知見を学ぶなど、「生きた講義」を現場で学んだ非常に有意義な内容となりました。



博物館実習状況

本実習受け入れは、本学の学内共同教育研究施設としての本館の役割を遺憾なく発揮したものであり、教育の普及に寄与・貢献したものです。今後は、野外実習を取り入れ自ら採集した教材類を使って実習の効果を高めたいものです。



第1期博物館実習生9名と教官たち

総合博物館の第2回公開シンポジウム

アジアでは莫大な恐竜化石が発掘され、それらの成果は世界の恐竜研究を大きく書き換えつつあります。日本でも最近多数の恐竜化石が発掘され、また海外発掘に協力するなど、以前に比べると、“恐竜学”への貢献は飛躍的に増大しつつあります。このような成果を踏まえ、国際学術シンポジウム「アジアの恐竜研究・現状と将来展望」を平成12年2月26日（土）午後に学術交流会館で開催し、67名の参加者がありました。

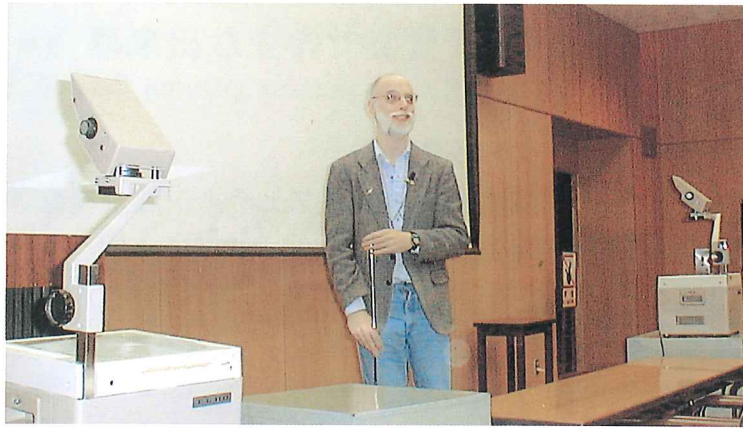
小泉 格（館長）による北海道大学総合博物館の設立経緯と外国人研究員デイヴィッドワイシャンペル客員教授を中心とした恐竜学に関するシンポジウムが盛会であることを期待するとの開催挨拶の後に、個別講演に移った。

鈴木大輔・箕浦名知男・David Weishampel は日本竜 *Nipponosaurus sachalinensis* Nagao, 1936の再記載と系統的な位置について、標本の精密な再クリーニングと綿密な観察の結果、化石骨格は(1)いくつかの特徴的な形質をもつことから有効な種であること、(2)幼体であること、(3)系統解析からランベオサウルス亜科に属する *Hipacrosaurus* に近縁な恐竜であること、(4)ランベオサウルス亜科の多くが北米に由来することから、ベーリング陸橋を渡ってアジアに渡ってきたことが示唆される。

長谷川善和・真鍋真・早川浩司 は白亜紀後期の日本の恐竜について、日本における40個体に及ぶ中生代大型爬虫類化石のそれぞれについて研究の現状を、特に最近の“恐竜”化石の産出例について詳しい研究状況を述べた。

平山 廉 は白亜紀陸棲脊椎動物の古生物地理について、白亜紀恐竜のみならず、特に亀類の古生物地理学的研究から、白亜紀後期のアジアと北米が同一生物地理区に属していた可能性の高いことを示した。これらの多くは白亜紀前期のアジア起源のものがベーリングアを越えて北米に移住したものと考えられる。一方、南半球のゴンドワナ地域とは際立った差異が認められるが、白亜紀末になると北半球と南半球とは共通となり、新生代の陸棲脊椎動物群の生物相の成立過程に影響を及ぼしている。

渡部真人 はモンゴルゴビ砂漠における白亜紀恐竜動物群の多様性と進化—アジアにおける最も恐竜化石の豊富な地域の例—について述べたが、苛酷な自然環境から発掘作業は困難なことが多いとした。一般にアジア産の恐竜には最も原始的な形態のものが多いが、モンゴル産のものは特にその傾向が強い。



デイヴィッド ワイシャンベル客員教授の講演

デイヴィッド ワイシャンベルはアジア産の恐竜化石による恐竜学の飛躍的進展－鳥脚類恐竜の例－について述べた。中国やモンゴルを主とするアジアは三畳紀から後期白亜紀までのあらゆる時代の恐竜化石を最も多産する地域であること。これら恐竜の発生の起源的な地域であることを示唆しているが、草食である鳥脚類恐竜の系統進化多くはそれぞれの種類の最も原始的な形態のものが多く、アジアが多くの恐竜の系統はアジア産のものが仮になかったとしても一般的な系列で明らかにすることができるため大きな変化を示すことはないとした。しかし、一方、鳥脚類恐竜の移動・分散・絶滅を研究する上でアジア産の化石は必要不可欠であるとした。

江木直子はハドロサウルス類の上腕骨の形－形態比較と運動行動推定－について、成長段階の異なった30個体以上のハドロサウルス類の上腕骨の形態を比較検討した結果、大きく2つの形態の違いが認められたことを述べた。これらの形態の違いは前脚の動かし方の違いに帰結できることからハドロサウルス類には生活行動の違いによって大きく分けて二つのグループのあることが示唆されることを指摘した。

瀬戸口烈司は恐竜の行動の復元の妥当性について、恐竜研究者は現生の各種動物になぞらえて恐竜の行動や生活の復元を行っているが、爬虫類である恐竜の復元には現生の爬虫類の正確な機能や生活との比較に基づいて復元をしなければならないとした。爬虫類の脳や感覚器は哺乳類や鳥類とは根本的に異なっていることを忘れてはならないこと。例えば、表情を示す顔面神経も皮膚も爬虫類にはありえないにもかかわらず、あたかも表情を持つかのごとき復元は間違っていること。また、爬虫類の聴覚機能には音を聞く機能はないにもかかわらず、鳥脚類恐竜のいわゆる“とさか”を発声器と考えるのは根本的な間違いであることなどを述べた。

箕浦名知男（研究部・助教授）

8月1日から平成12年3月31日までの主な出来事

- 8. 2 大型計算機センター職員見学
- 3 オーストラリア教育訓練青年省クエティン課長視察
- 27 金沢大学拡充整備促進協議会構成メンバー来館
- 31 第2回総合博物館教官会議を開催
- 9. 8 第2回企画展示専門委員会を開催
- 9 文部省学術情報課馬淵専門員視察
- 10 125周年記念事業構成メンバー視察
- 18 NHK教育テレビ「サイエンスアイ」総合博物館を紹介
- 20 岩内高等学校生徒見学
- 29 アデレード大学（オーストラリア）マリー・オケイン副学長視察
- 10. 4 韓国大学生訪日研修団見学
- 6 総合博物館の入館者が1万人を達成
- 11. 2 第3回総合博物館運営委員会を開催
- 8 文部省福祉班主査外2名視察
- 15 札幌国際大学博物館実習学生見学
- 16 小樽市教育委員会中学生理科部会メンバー見学
- 12. 2 第4回総合博物館運営委員会を開催
- 21 第3回企画展示専門委員会を開催
- 12. 1. 13 第4回企画展示専門委員会を開催
- 1. 11 本学文学部履修科目の博物館実習を実施
- 1. 21 「黒鉱シンポジウム」を共催
- 1. 26 第5回総合博物館運営委員会を開催
- 2. 10 第5回企画展示専門委員会を開催
- 2. 14 第1回総合博物館資料部会を開催
- 2. 26 第2回総合博物館公開シンポジウムを開催
- 2. 28 第6回総合博物館運営委員会を開催
- 3. 2 第6回企画展示専門委員会を開催
- 3. 15 理学部本館改修工事竣工検査

博物館教職員（平成12年4月1日現在）

館長

小泉 格（資料部長、理学研究科・教授）

Tel: 706-2733、E-mail: itaru@ep.sci.hokudai.ac.jp

研究部教官

資料基礎研究系

教授 高橋英樹

Tel: 706-4508、E-mail: hide@museum.hokudai.ac.jp

助教授 天野哲也

Tel: 706-3900、E-mail: amano@museum.hokudai.ac.jp

助手 今村 央

Tel: 0138-40-5553、E-mail: imamura@museum.hokudai.ac.jp

資料開発系

教授 松枝大治（研究部長）

Tel: 706-2754、E-mail: matsueda@museum.hokudai.ac.jp

助教授 箕浦名知男

Tel: 706-2724、E-mail: minoura@museum.hokudai.ac.jp

博物館情報メディア系

助教授 大原昌宏

Tel: 706-4506、E-mail: ohara@museum.hokudai.ac.jp

助手 阿部剛史

Tel: 706-4507、E-mail: tabe@museum.hokudai.ac.jp

資料部研究員

梶原 景昭（大学院文学研究科・教授）

増田 道夫（大学院理学研究科・教授）

新井田清信（大学院理学研究科・助教授）

菊地 武（大学院理学研究科・助教授）

川村 信人（大学院理学研究科・講師）

土屋 篁（大学院理学研究科・助手）

長嶋 和郎（大学院医学研究科・教授）

越野 武（大学院工学研究科・教授）

小林 英嗣（大学院工学研究科・教授）

宮永 喜一（大学院工学研究科・教授）

諏訪 正明（大学院農学研究科・教授）

上田 一郎（大学院農学研究科・教授）

綿貫 豊（大学院農学研究科・助教授）

藤田 正一（大学院獣医学研究科・教授）

松田 彊（農学部附属演習林・教授）

船越 三朗（農学部附属演習林・助手）

事務部

理学研究科・理学部事務長

森 知二

理学研究科・理学部事務長補佐

鈴木光夫

理学研究科・理学部専門員

浅野志のぶ

総合博物館事務掛長

田川 諭

総合博物館事務掛

佐藤永晃

Tel: 706-2658、Fax: 706-4029、E-mail: s-tagawa@jimu.hokudai.ac.jp

hsatou@jimu.hokudai.ac.jp

北海道大学総合博物館ニュース
第2号

北海道大学総合博物館ニュース

発行日：平成12年4月10日

発行者：小泉 格

発行所：北海道大学総合博物館

住所：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

電話：011-706-2658

E-mail：hsatou@jimu.hokudai.ac.jp